

八盲 オリンピック・パラリンピック通信

Smile For Everyone



東京都立八王子盲学校長 山岸直人

第6号（令和3年10月29日）

8月24日の東京2020パラリンピック競技大会開会式で国際パラリンピック委員会会長が、「IPCと国際障害同盟が主導し、WeThe15キャンペーンを立ち上げました。今後の10年にわたり、何らかの障害がある世界人口15%の人々の見方を変えるべきグローバルに挑みます」と宣言した。そして、選手たちに向かって、「みなさんの今後の活躍は、12億（世界人口15%）の人々の人生を永遠に変えるだろう。それがスポーツの力だ」と訴えかけました。

本通信では、ブラインドサッカーの力で、12億人の未来へ新たな一歩を踏み出した黒田智成先生の、3つの想いをお伝えします。



◆東京2020パラリンピック競技大会後の黒田智成先生の想い

私は2002年にブラインドサッカーと出会い、2004年アテネ、2008年北京、2012年ロンドン、2016年リオデジャネイロ、2021年東京と5回パラリンピック出場にチャレンジし、開催国枠で、長年の夢を叶えることができました。

夢の舞台での、世界トップレベルのライバルたちとの真剣勝負、その一瞬一瞬が私にとって幸せな時間でした。結果はスペインに勝利し5位と、目標のメダル獲得には至りませんでした。しかし、これまで積み上げてきた個人としての技術やチームとしての戦術を出し切ることはできたという充実感も感じています。

①東京2020パラリンピック大会を通じて学んでこと

私は、大会を通じて「困難な状況に対して簡単にあきらめず、どのような工夫をすればできるのかを考え、努力することの大切さ」を学びました。障害者スポーツの価値は、工夫と努力にあふれていることです。コロナ禍の大会実施・運営においても、大会関係者や選手の工夫と努力が不可欠でした。

②その学んだことを教員として、どのように活かすか

“自分の目の前にある困難さと向き合い、どのように工夫すれば改善できるか”ということ、児童・生徒に伝えることが、役割だと考えています。その結果として、児童・生徒が、自らの夢に向かって努力を重ねていくことに繋がると考えています。

③選手としての今後の目標と選手引退後の夢や目標

選手としては、これまで経験してきたことを、次世代の選手たちに伝えることです。プレーを通じ日本が金メダルをとれるように、競技力の向上に貢献していきます。

引退後は、「誰もが住みやすい社会」を創っていくことに貢献したいです。パラリンピック後に、白杖を使って町中を歩いていると、「信号が青になりましたよ」、「お手伝いしましょうか？」等と言葉をかけてくれる人が増えたように感じています。この実感が、パラリンピックの効果だとしたら、これこそ真の「レガシー（遺産）」です。この機会をきっかけに、プレー以外の部分でも、私にできることの工夫と努力を続けていきたいと考えています。



小学部高学年のオリパラ授業記念撮影

◆本校卒業生の東京2020パラリンピック大会の結果

- ・日向賢氏（ひなたさとる）；5位（ブラインドサッカー）
- ・若杉遥氏（わかすぎはるか）；3位（ゴールボール女子）
- ・川嶋悠太氏（かわしまゆうた）；5位（ゴールボール男子）